



優曇華物語

189
54



於
189
八

優曇華物語卷之四下

江戸

山東軒主人編

第九段

野猪老嫗腹篋の児をとる事

爰こゝ又またかの来海浦守きうかいのりもりが弟あにに健助けんすけといふ者ものありけり。諸もろの武藝ぶげい云いふ達まつしつげ
 て弓ゆみひく業わざをよよく力量りきやう人ひとふままぐれるる武夫ぶふうにて。原もと兄あにももに渥美あつみ在津門さつもんふ
 仕つかへぬた。弟あに門かどがぬひり為な人のちちをく。且かつ武士ぶしの業わざに達まつしつることゆゑ。あ毎まある
 家士いへのうちあま別べつに憐あはれれをくへてゆゆしつつひひるが。偶あち津門さつもんが妻つまのこ女むすめ生な袖そで
 ととへる者ものと。みみををくしつつひひ其そのううああららぬて。家いへのな庭にわああれれああ
 ふふべべりりをを。左津門さつもんが妻つまととびびんんああととおおももひひ。かか水みづ篋かぶををくくるる
 一ひと間まをを。ひひそそううににひひららききてて走はししめめけけぬぬ。ああ人ひとハハ涙なみだををおおししかかるる報むす
 みるみるせんせんとと。ゆゆををががみみすす。夜よおおままぎぎれれててののががれれぬぬ。左津門さつもんも妻つまが情なさけ

あつんと推量おしりげぬ。追人おひてをもちけり。其修そのまふまでおさぬ。あ人あつり八日ひが陰かげふあ。
屍しとあり。このむ木こかげ陰あめも雨あめもりて。刃やいばをひききき。所ところもあけぬ。生ま袖そでが正ただ。
もの。信濃國しんのくににあるを力ちからふ尋行じんぎょう善光寺ぜんくわうじの布ふらうに住家すまもよめてせ。
を妻つむと。劍法けんぽう打拳うちけんを人ひとふ教をて。かそけき便べんと。あそき烟けんをさそけるが。
業わざハさくひあく。野の由よしれど。ところざ。高く。人ひとふささる性さがあぬ。おのつらう
人もありむ。さふも住まくことを出来いて。又下野國あもりのくにわうつり。黒髪山くろがみやまをを
あつと。一里いちりむらうこあ。の村むらに住すぬ。此こゝあつらふ武藝ぶげいを学まぶ人もあけぬ。
せんま。あく。獨戸ひとりどの業わざを法はていとあ。こま。又あつらうがあり。ふ男子あんしをまう
け。名なを小松こまつとよびて。こに五歳ごさいふあり。生うぬつさか。こ。顔うらわさ。あつらう
よ。あり。扱さある。小健助けんすけ。去年こぞの冬ふゆより長病ながびやうを患うひ。百日ひゃくにちああり。あつらうひを
せ。ぬ。益えき困窮くわんきやう。一重いちじゆうの衣えやぬ。さる器うつわま。こ。薬くすりふらへ。米こめふ。て。塵ちり

むらりの物ものも残のこさ。病びやう八日ひが異いに。あつらう。いつ息いきも。べうも。え。ぬ。あつらう。
か。さ。限かぎり。あ。ひ。め。も。ま。よ。も。ま。から。枕まくら方かたふ。つ。き。を。ひ。心こころを。尽つくして。看み病びやうけ
ぬ。を。あ。つ。ら。う。い。も。え。ぬ。今いまハ神佛かみぶつの力ちからを。さ。の。む。より。外あはと。ひ。と。ま。さ。中ちゆう禪ぜん寺じ
の觀音くわんおんを。い。の。う。り。り。又また黒髪山くろがみやまの麓ふもとに。は。こ。る。曠原くわんげんの。うち。に。黄土おうどふ
屋やを。い。と。あ。み。て。望のぞく。住すぬ。老女らうにょあり。う。ち。ま。ら。ふ。ひ。さ。る。破敗くわんぱい屋やの。壁かべの
骨ほねあ。つ。ら。う。ぬ。て。灯とう大だいふ。る。る。月つきを。も。じ。雷らいふ。さ。か。ぬ。古松こしょうの。軒のきふ。を。び。え。て。
鳥とり葛くわハ。お。の。か。ま。ゆ。く。を。ひ。ま。と。ひ。答こたハ。は。は。く。む。て。老龍らうりゆうの。雲くもふ。の。ぶ。あ。つ。ら。う。と。
か。ら。高たか梢せう紙しと。して。夜雨やう樞しゆを。敲たたの。外あは人ひと跡あとと。え。さ。る。住す家かあり。御おん此こゝ丸まる
女にょ前ぜん頂てい足柄山あしはらやまの。麓ふもとに。竹たけの。下したに。お。酒さけ店てんを。あ。ぬ。へ。て。あ。つ。ら。う。の。旅たび人ひとを。う。り。の。海うみ
賊ぞく婆ばあ。つ。ら。う。原はらハ。穂波ほなふ。て。生うぬ。つ。さ。貪欲こんよくの。心こころふ。り。く。毒どく惡あく強がう氣きの。者ものあり。
あ。つ。ら。う。あ。つ。ら。う。山さん中ちゆうあ。つ。て。手負てかひ野猪やじうと。さ。つ。ら。う。ひ。片目かためを。牙きばふ。あ。け。ら。ぬ。て。時ときと。あ。つ。ら。う。



由是に譯名を野猪老嫗と稱しけり。かゆ大蛇太郎に去るが賊の徒中
 にらりりそ。志を多く彼地に住しけり。ちりちり老婦をもちに當國へ入り。お
 てハ子をとりあがる事をありしに。或ハ墮胎の藥を賣或ハ人の子を養
 びき。又ハ人の子を養ひて金をむさかり。その子をくびりにして。病死と
 して。門ちりちり古井のちりちり屍をかくまひ。くくくくといふ教をま
 ひき。ある惡波あり。初一日ひちりちり雨とちりちりあうまて。いとあ
 けい。外のかに人のうめく声も老嫗亭を拍はし立出て又ハ年のちりちり
 四五とちりちりさ女。身ハその物の肌薄き衣をきて。いとまじりさ
 あり。ありぬ女の。ささささ。人品賤し。くくく。又あかちりちり
 顔のかり手脚のつみ。いとまじり。いとまじり。頭髪を梳ぎ面上をい
 り。自然の美艷。人の眼を奪ふ。あるが。此嫗ハ身をよせて。

苦い。居たり。老嫗近く。婦人。いつくの人。病小
 苦い。居たり。老嫗近く。婦人。いつくの人。病小
 保養。一五として。脊さきり。積氣のさし。血のた。あや
 やま。懐か手を。い。帯を。よ。月
 心。中。且。悦。益。婦。人。み。あ。見
 月。女。妻。八。老。嫗。少。氣。以
 途。中。あ。成。と。く。傳。お。家。の。門。近。く。立
 せ。ひ。入。お。老。嫗。少。氣。以
 幸。ひ。お。女。子。を。あ。る。を。あ。り。し。に。妊。娠。の。婦。人。を。あ
 手。あ。る。業。あ。る。よ。か。抱。ま。あ。せん。さ。あ。り。て。雨
 手。を。

優曇華 卷之四

ねば古井のうちより一道の陰大朦朧と焚あがりぬ女、おを一目見る
 よう。おをぬをのき。膽魄をりしあひ此家へうあがど。妖怪の栖あらんかの
 老嫗も。変化のものあや。やくらを遁さるじと。表のくこ一走り出櫃をひ
 きあげんとまゐる外。外のくこよりさびくさじかあたるふや。さうくをぬとよ
 ありど。裏口より遁おんとけこふゆきて又おば。こもきびくさきか
 とめて。いふともせんまへあく。大ふらうらえて。怒氣のわりめくるめきて打倒
 ぬ。まじし正氣つうざりけるが。軒もる滴の口中におちわりとるが。ひやうとおぶ
 えて。やしく人とち出来垣をやあうても遁出んとおもひ。裾をわげ。表
 のうへへ走り出る折も。おはひくけさるるじろより。まきひくこさる声して。ややく
 婦人物よりまへさるあり。まじし待まへと声うけらぬて。又膽をけり。こび後
 を顧。おぼじの老嫗裏口よりゆり来て。行燈のうけおとくとまきうり。女はじ

めハこちちあーまうへお情ある言お心ゆして。あそぶの次女を又さきめざりしが。
 今垢小眼をこめてよく入ぬ。頭の毛ハ佐野の白芋をみかせるごとく。片目
 光りハ小塩の鏡を磨きとてさる異あまど。おをゆに老女あり。女うち口
 あくさつ。おんがいつのるおゆりあひ。ままもまやままにしてまうらあん
 とて。走りおんとまゐるを。まづまちまへと引まぬ。おんがふこらあき所望あり。け
 ひきまふべきや。女もく。まうのくまふハ何等のうぞ。此がふ似合とるう。お信らバ。
 うけらひやまへ。老嫗へもく。所望といふハ別のうおあがま。おん身の分う
 ちおつささるものを乞得じ。いふうけひきまふべきや。女いもく。んむふが
 こしく貧しき身あぬを。刃うちにつささる物とてハ此襪襪一重のひ
 塵をうりの物もあまきを。何を目あてたまうハのくまふぞ。老嫗へもく。
 望むもの外おあがま。おんがの胎内おある子が望まあり。こころよくあてて

まらんや。女打笑ひ。その望こあふ。その水とて申すのこまへ。かむり。胸ひや
 まはじきに。騎あもあふ。ぬ子を産あ。べり。望らに。まうまへ。老嫗い
 なく。産出。くる子。用に。く。い。ま。胎内。ある子を。胎子。といひて。高
 價を得る。妙薬あり。ゆゑに。其腹。籠。のぞみ。ぞ。女驚。胎内。あ
 る子を。い。して。と。ま。や。老嫗。打。て。つひ。其腹。を。ち。わ。心。安
 する。婦人。何ゆゑ。其。横。子。あ。ま。ま。ふ。此。老嫗。が。い。く。あ。ま
 申。つひ。一。思。ひ。殺。一。ア。さん。よ。ま。人。ぞ。へ。お。せ。を。申。お。ま。ま。や。と。い
 ひて。隻眼。を。ま。め。り。ま。ぬ。女。身。を。ち。め。ま。ぬ。ば。ご。う。あり。て。も。妻。を。殺
 さんと。つ。あ。く。ま。言。い。ふ。人。う。其。薬。を。も。と。あ。ま。ま。に。日。夜。一。妊。婦。
 世。お。お。ま。もの。あ。ぬ。と。尋。る。時。あ。や。あ。く。ふ。あ。ま。もの。を。ぬ。益。あ。る。を
 といひて。ひ。ぬ。ま。ま。る。あ。冒。く。お。ん。分。ふ。く。ま。ひ。て。ま。ま。看。經。も

せぬ。やう。殺。して。仏。と。か。み。に。半。老。て。後。生。が。大。う。そ。嗚。呼。阿。弥。陀。仏。く
 と。唱。る。口。八。目。ま。で。さ。げ。野。猪。老。嫗。と。あ。つ。け。も。ば。理。あ。て。葬。頭。河。の。奪
 衣。婆。が。新。到。罪。人。を。呵。責。する。光。景。も。か。う。ぞ。あ。め。お。も。ぬ。る。女。ハ
 ある。お。も。あ。ぬ。ぬ。お。ひ。妻。を。殺。して。胎。内。の。子。を。と。ん。と。の。ま。ふ。原。ハ。金
 ゆゑ。の。こ。と。あ。て。あ。ん。さ。む。う。金。を。ゆ。く。お。お。さ。バ。此。身。を。遊。女。お。賣。て。あ。り
 とも。金。の。の。へ。て。ま。あ。せ。ん。と。ひ。ぬ。が。く。胎。内。の。子。を。産。お。と。ま。ま。で。ま。あ。て
 と。よ。く。深。き。縁。あ。ぬ。ま。ま。妻。が。腹。お。宿。り。来。て。已。に。八。月。お。み。つ。る。子。に。せ。あ
 て。此。世。の。あ。り。を。え。せ。と。ひ。一。日。あ。り。ま。も。親。よ。子。と。ご。ひ。お。よ。ひ。つ。よ。ま。ま
 ま。一。命。を。と。も。ち。に。サ。ハ。哀。れ。と。お。お。さ。ぬ。て。志。命。を。の。ま。い。い。い。い
 つ。ける。もの。あ。ぬ。ぬ。の。こ。ち。あ。う。ん。や。と。い。ひ。さ。して。そ。う。つ。ま。歎。を。顔。を。い
 て。ア。や。り。も。せ。ぬ。何。や。ら。もの。い。ま。ま。や。う。あ。る。が。年。老。と。ぬ。聾。て。ア。ら。う。が。い



傳
墨
卷
六
四

いづく。いさゝかきやうふ。よくちからふべし。とて。裾かけ襷褌をさかきひき
 ぬぎ。女道出んとするを。老姫猿臂を伸衣服の襟ひりとつて引よみ
 ある。菜刀を把てひらめらせ。女ハ何とせんまへ。あはれ。むへをけてさへ。は
 ありて。つぶるをすま。簀子をあはく踏あらし。息の根とめん。つさかたる。女
 を閃。老姫が袖の下をくぐりて。刃尖を避け。又身を轉してつさかたる。は
 けつ。まやつかひめぐり。つひ女の肩尖を。二三寸斬らば。阿と一声さげび。足
 ふみかしてよろめく所を。又つさかたる。菜刀の刃尖をもち。手ふたをさざり。皆
 さ息をつさて。いひる。かくま。でつぶるをすま。入。こてもかくても。妻を殺
 死ぬる。我身因果ともあさ。むべさ。が。さ。胎内の子。闇よりや。ま。迷
 ひ行。さぞ此母を尋ね。い。ある。あ。さ。宿世。て。我。あ。宿。り。ぞ。い。ひ
 て。あ。い。か。ん。く。を。理。ある。あ。あ。あ。し。ま。い。さ。益。益。の。縁。言。す。も。う。る。は。と。と。菜。刀

をまごけ。指をひくと。さ。ぬ。お。ち。て。鮮。血。ま。く。る。掌。を。合。せ。慈。悲。を。情。を。ま
 ぐ。の。命。を。お。し。む。病。ふ。は。を。る。夫。の。顔。宿。不。残。せ。幼。児。の。顔。一。目。ん。せ
 て。殺。して。さ。べ。此。あ。り。ふ。人。ハ。あ。き。う。妻。を。ま。と。ひ。む。り。ぬ。と。声。を。さ。り。ふ。さ。け。べ
 ども。素。人。家。を。ま。あ。れ。さ。る。一。ツ。家。あ。れ。ハ。只。空。吹。風。の。音。の。じ。て。誰。こ。こ。あ。る
 人。も。な。し。老。姫。は。ぬ。が。歎。を。耳。も。い。ぬ。を。汝。が。腹。の。子。ハ。我。為。ふ。宝。あり。あ。り
 み。と。ら。き。て。宝。を。そ。と。あ。ふ。て。ぬ。あ。も。や。冥。途。へ。や。ん。と。て。黒。髪。を。つ。く。こ
 引。よ。せて。の。げ。さ。ぬ。お。さ。へ。米。の。こ。と。く。劔。と。て。さ。る。菜。刀。を。ま。り。あ。は。して。む。あ
 さ。ら。を。さ。じ。さ。ゆ。け。ぬ。血。ハ。ね。ほ。ど。む。して。紅。の。泉。の。涌。流。を。か。こ。と。く。と。し。て
 八。倒。身。を。も。ご。へ。手。足。を。あ。る。ひ。四。苦。八。苦。を。一。度。ふ。あ。つ。む。る。若。し。こ。お。て。目
 も。あ。て。ら。ぬ。ぬ。光。景。あり。此。折。も。黒。髪。山。の。小。賊。は。じ。り。来。つ。樞。を。む。き。さ。す
 裏。に。入。此。体。を。え。て。も。ろ。を。ぬ。ぎ。女。の。あ。な。を。あ。ら。と。お。さ。へ。老。姫。の。心。あ。ら



に子をそりむといへむ。心得つきて。茶刀をそり手ふとり。乳の下を十文字に
 りさき。胎内を發てゑるに。胎子左り不つきてあぬむ。男子あんとおもは
 西してゑるに果してあなり。併むべし。八月おみちとる子あぬ。五輪をべて具り
 右の手をうごらしぬ。小賊大お悦び。老嫗そのよくぞるさぬ。此事寨主ふさ
 こえあげて。辛苦銀ハおもくまゐるまへ。さきわど。おん身の知させにより。や
 く来て。女でひせんと思ひが。どうしてひんどりゆ。おん身のるも。此女
 迦由をもせん。さつひーが。さもあて。重畳あり。老嫗そく。表裏の樞
 を。外のよりさびしくさじくめ。水。網の魚籠の鳥あり。おもふ。昨夜
 燈花の報あり。今朝喜鵲の噪あり。此福を得べき。あふせあるべし。此
 屍おん身かけゆ。人目ふくらぬ。谷底おきて。我ハあとより。胎子を
 とらえて。山寨ふして。夜のあけぬ間。おやとくといへむ。心得つきて

小賊ハ屍をそりて。馳行けり。老嫗ハあとにさまり。篋子の。に
 たる。血ををのび。酒をうち。ゆる。疲水をやま。胎子を麻
 笥おいて。とらへ。月の光りお乗下。黒髪山おい。さむ。かて。小
 賊ハ屍をあげて。一里むりか。あ。の山。小持行。海。谷底。おけ。ま
 と。ち。小黒髪山おい。さむ。行道。おて。折。よく。老嫗。お行。合。お人。つ。ぬ。と。ち
 岩窟。おい。さむ。と。さ。こ。え。て。胎子。を。は。出。し。ぬ。大蛇。太郎。大お説
 び。おもく。賞銀。を。とり。て。老嫗。と。小賊。おあ。さ。ふ。そ。夜。おあ。け。し。て。さ。ぬ。い。そ
 が。い。く。鰐。菴。お命。ト。て。茶。を。調。へ。ぬ。り。と。ぞ

第十段 黒髪山佛法僧の事

爰に又健助が妻。玄袖ハ夫の病をいのりの為。中禪寺の観音。おは。参
 ると。日。毎。お。出。行。が。一。日。又。い。つ。も。の。い。と。く。出。て。黄。昏。の。頃。ま。で。う。へ。も

手をとり。からしめて。谷底におりこち。近くいりて。死あふの屍つみの妻まをの生なまの袖そでを
ぬぐ。一目ひとめ見るより。この夢ゆめうらうら。よもまことおあはれと。あはれおあはれと。
尻居しりゐに撞ぶつ地ぢ倒たふ水みづ魂たまあはれ人のごころ。心こころ空からおありて。涙なみださへいで。お松まつの屍しの顔かほ
をあで。母ははさぬ何なにゆゑか。こぼし。さな女むすめおありむし。ものいひむへ。父ちちさぬ母はは
さぬ。死しをひし。うらやまうよびいりて。とどいひつ。屍たまをわりうら。母ははさぬ
母子ははごのうら。哭なみだも。哀あはれふじ。健けん助すけあはれ。ありて人ひとさち。出来いでき妻つまのあはれ。
さな女むすめをよく。えぬ。みづうの黒くろ髪かみハ血ちおをみて。打うち乱らんぬ。髪かみハ薄うす縹へいのいろ
おあり。唇くちびるハ濃こも紫むらさきおあり。目め口くち鼻びより。血ちを出いして。つみ。めさ。のく。こも。
がふと思おもひやうる。肩かた尖さよう。胸むねのあう。をくひ。おふ。胎た内ないの子こも。ひ。尽つく
せし。と。え。えて。か。ち。も。ほ。ご。鳩はと尾お骨ほね。膽たん骨ぼねのこ。ち。ろ。く。あ。は。れ。ぬ。肉にく。ま。
べて。く。ぬ。ふ。ぬ。墨すみを。ま。じ。へ。こ。る。い。ろ。ふ。あり。血ち臭くささ。こ。も。鼻びを。な。を。ひ。て。堪たげ。じ。

五臟ござう六腑りくぷも。く。ひ。尽つく。大腸たいちやう小腸せうちやう三焦さんせうの。こ。も。ひ。の。こ。も。か。こ。も。み。ぬ。ち。り。て。
蠅あぶら蚋が姑この。ぬ。を。喂か。上かみ世よ世よ葬まうを。せ。さ。る。時ときお。似にこ。う。嗟あはれ呼なげ痛いた哉や。玉たま臉かほ花はな儂なま。尽つく
く。な。て。故ゆゑの。容かたちハ。露つゆを。り。も。残のこ。ど。南なん柯かの。夢ゆめと。醒さめ。て。ぬ。ぬ。唯ただ。南なん。大だい
師しの。無む常じやうの。賦ふを。讀よ。東とう坡ぱ居き士しの。九く相さうの。首くびを。え。る。こ。も。ち。て。え。る。目めも。あ
て。う。こ。う。常じやうを。さ。世よの。さ。が。あ。ぬ。ハ。蟬せみの。夕ゆふを。ま。ぬ。あ。は。れ。ひ。の。が。る。て。さ。ふ。あ。ぬ
ど。か。く。惡あく獸じゆうに。く。ひ。殺ころぬ。手て足あしを。異ことふ。て。死しを。る。又またあ。き。例れい也や。あ。は。れ。世よの
報むかひと。お。も。へ。い。と。悲かなく。屍たまを。抱かかて。哭なみだる。が。妻つまの。襪はきの。袂たもとより。二ふたツの。布ぬの袋ふくろの。ま。ら
ひ。出いこ。る。を。さ。り。あ。げ。て。え。ぬ。ハ。米こめ麥むぎ粟あはひ稗ひえの。類たぐひハ。鐵てつを。ま。じ。へ。ぬ。
貧ひん苦くお。せ。ぬ。り。中ちゆう禪ぜん寺じに。日あつ參さんを。と。い。ひ。し。我われか。か。て。袖そでを。ま。じ。へ。ぬ。
彼かれを。妻つまと。せ。し。う。ら。の。う。困こん窮きゆうあ。は。れ。夏なつ蚊か帳ちやうを。と。ぬ。ぬ。冬ふゆ禱たうを。と。ぬ。
身みハ。襪はきを。ま。じ。へ。せ。口くちハ。食しょくを。く。せ。立たち居ゐ苦く。物もの毎まいに。心こころを。た。げ。ぬ。

夏
山
竹
石
水
鳥
獸
人
物
卷
之
四
十
一



伊
勢
志
卷
之
四
十
一



志はげ程も安んず心こそさせざるふ。彼方にも愁る色なく。朝夕まめやり小使
 て。よく女の心を守りつるに。あごとてかく。あまほそ死を遂げけるぞや。世に
 女を憐む。神仏におまをさぬ。胎内の子も八月にみち五輪も見りつらんを。世に
 風ふもあてき。悪獸の餌食とあまこと。そもいりある因果ぞ。又彼が袖を
 る心の内。さぞあまをさしうつらんあど。日頃の強氣も。悲歎おせありてよ。こ
 けるあや。丈夫お似ぬ。女にきくう言までもいあふて。哭けり。やう候をを
 彼狼ハ。妻の敵子の仇あり。我病あま時あま。只一箭お射殺して。仇を
 報んむるものを。かくおせさる。おひて。カもぬけさぬ。夫もうま。くちを
 さよとて。拳をあま。牙をあま。しりるが。布とあげくとも。今ハうひ。せ
 めて。あま。か。を。と。り。を。さ。む。る。支。度。せん。と。お。も。ひ。あ。は。し。て。戻。お。む。ひ。南
 無。幽。霊。成。等。正。覺。阿。彌。陀。佛。く。と。ま。ま。へ。泣。や。と。る。小。松。が。手。を。さ。り。て。

よろめら。つ。家。小。久。り。ぬ。彼。惡。法。に。殺。お。と。る。女。ハ。乃。此。の。健。助。ハ。唯
 狼。の。為。に。殺。お。し。この。お。も。へ。る。も。う。べ。あ。り。は。て。か。て。健。助。家。小。久。り。槍。を
 ひとめ。ん。ふ。も。一。錢。の。貯。あ。け。ぬ。べ。う。お。も。せん。ま。ま。あ。く。衣。服。ハ。と。代。法。て。む。ほ
 く。空。と。あ。り。と。る。旧。葛。籠。の。あ。る。を。取。出。里。人。を。か。さ。り。負。し。め。て。再。か。し
 に。い。ら。む。む。ほ。ま。か。を。葛。籠。お。ま。め。て。ゆ。り。る。が。野。邊。に。お。く。ら。ん。便。も。お
 け。ぬ。と。や。せ。海。か。く。や。ま。を。べ。ま。と。お。も。ひ。を。い。て。海。め。手。を。又。ま。首。を。低。て。つ。く
 来。し。く。を。お。も。ひ。我。若。う。じ。時。主。君。の。掟。を。お。り。お。も。さ。罪。を。犯。せ。し。を。
 海。ま。情。を。と。ぬ。り。て。危。ま。一。命。を。ま。ぬ。り。と。る。洪。恩。泰。山。よ。り。も。高。く。此
 海。よ。う。も。海。し。此。の。心。お。銘。し。骨。お。鏝。て。刀。銭。を。ま。ま。で。忘。る。ま。し。と。
 誓。言。以。時。節。を。待。つ。の。功。を。と。と。罪。を。賄。露。む。う。り。も。報。ん。も。の。と。よ。あ。の
 と。念。慮。お。り。け。て。こ。の。年。月。を。お。く。り。つ。る。お。か。く。さ。め。ぐ。の。必。お。あ。ひ。世。お。非。心。

このついでにぐるるハ皆是不忠の報あるべし。妻むはしくありしうへハ我病を
看病へさき者もあく。一朝の糧之貯ぬ身ぬは是より後ハ一日をもく
るべし便法。去りのことありまじ。病日小異におもひていつおとりにたう
づらもあらず。残れる雪の日陰まら回のくちして。あつこまをこし。此うへ
おまらるぞあふバ獨残れる幼児を誰ありてう養ふべき。飢死せんハ必定
あり。こそ武運お尽こぬバ彼をあふ残して。うさめをえせんより。寧
手おつけて。糸ハ腹まきりて死ん小志しじ。おもひをさごめ貧乏中中武
夫の親ハ失はせ。一腰残せし刀を把てりしおかじ。小松をえぬハ小松ハ
唯葛籠おとりつぎ。母子のりくとして哭叫。健助目もあてられぬ。涙をふり
おちて。きえしハえさきとちけるが。かくてハとせむとおもひおし。小松が脊
をあふ。はかじこそ者あぬバ。おつふことをよこすべし。母の屍ハこそあぬ。

免魄ハ極樂とて。もろか不遠を國ありけり。わうをうり慕とも再とふゆ来を。
さむらう母おあひこくハ。汝かの國お行さるや。さもあふバ父もそこむにわくべ。かの
國おハ四陵頻加とて。おしるく。轉鳥もあり。鉢特摩摩華とて。うつじま花
もあるぞとよ。小松打聞て。をハくぬ。まことよ。まらうをこし小連行て。母を
にあせて。ぶぶくとして。物つさまへぬ。幼児のつとぬ。げふ催せ。健助ハと
胸あさがり。汝の國おおんとあふ。西おむひて眼をまら。掌を合せて念
佛をまあふべし。かまへり。目をむく。ことありぬと。をしぬ。小松おとしや
う小居おありて。さやうある掌を合ひ。念仏を念ふ。念仏を念ふ。念仏を念ふ。健助
も西の方をゆをが。一念彌陀佛。即滅無量罪阿彌陀佛。息を
げふ。あへつ。氷あを刀をぬきて。小松が背後おましまり。恩愛切
悲し。五臟六腑も悩亂して。さけち。さう想をゆ。手抖脚軟て。手をく

貞友 田舎の 上巻

ごきやうもあつて心おこしひるるがかくてさきさうろ志を励しよろめくは
をわくまめて念佛まうせくといひつ。小松が頂をあかあげて。ちびく刀
ふうあぐる折しも。外の方より申水をやまりひあ。志はしつくと声あたる人あ。健助
声つけつけて心あつて手をどめて。外の方をえ申水。若き人。妍婦人を
ともあひ。ゆゑまへとて裏お入る。健助折あしといふがいく刀を鞘おをさあ
て。あつふ。旅人れをほして。吾主、来海浦守の弟健助とふ人あ。あつてや
つ。健助いも。いふもやつぬ。その者あて侍り。志のあつ何所の所方を
とて。いぶしげある。わああるを。かの婦人か。ううより。打見て。いふ健助はま
をえ忘ぬ。いとつ。健助ぬをすて心つと。此婦人をよくえぬ。主君の娘
見あぬ。大お驚馬。いそが。貴の上伏て礼をし。やつぬ心中ささじ
さきある。うへ。あり。りり。とる。所女あぬ。ん。かへなりぬ。無礼の罪ををしえへ

さう。さしちうし。こあへ。て塵打掃。し。あ人を土坐おまをて。暮しくつひる。八
姫君何ゆえ。うり。とる。市安あて。おもひうけぞ。あつぬをせぬ。あや。若き水
人。あ等の水方あて。ゆ。弓見。云。ぶうる。うぶあり。とある。望月。皎二。郎。辰
と。中。を。清。方。あり。妻。が。男。の。う。の。う。は。を。物。語。一。席。に。尽。す。が。し。と。い。ふ。
皎二郎の尾あをて。吾主。信濃國。善光寺。の。あり。あ。住。ぬ。は。を。す。又。當。國。あ。り。り。
我等あ人うこ。お。尋。行。今。當。國。あ。り。つ。り。住。る。は。を。す。又。當。國。あ。り。り。
うらりじて。さ。あ。あ。あ。り。前。程。より。門。外。あ。り。を。み。て。様。子。を。窺。し。が。
幼兒。を。手。お。け。ん。と。せ。ぬ。水。ゆ。え。声。う。け。て。と。め。さ。り。あ。等。あ。人。の。多。き。若。同
士。つ。水。を。あ。つ。ぬ。あ。い。め。さ。さ。る。と。あ。て。さ。さ。さ。し。う。と。疑。ひ。お。ん。が。あ。り。
さる。こ。とも。あ。ら。む。仔細。あ。ら。む。語。久。し。且。を。ぬ。後。也。前。問。つ。く。あ。あ。
等。の。せ。あ。り。と。あ。り。と。あ。り。と。幼兒。を。失。し。と。い。は。せ。ぬ。水。を。健。助。涙。を。ま。り。

長生集巻六
新編源氏物語
三十一



何事

おとし。をらりし。光景を。目おけつる。か。おもひつめたる。系分の。人の
物語。又一。席。お終。一。が。且。姫君の。此。分の。う。へ。を。氣。づ。い。じ。れ。ぬ。を。や。く。せ。ぬ。
せ。せ。む。へ。と。の。ふ。お。ぞ。弓。見。涙。さ。じ。か。み。て。父。滝。美。太。史。の。管。領。持。氏。公。の。隠。謀。お。
く。く。く。足。柄。山。お。て。賊。の。お。お。害。せ。ぬ。お。し。う。を。始。し。家。を。没。収。せ。ぬ。水。曾。路。
の。雪。に。苦。と。守。守。が。分。ま。り。し。う。及。び。皎。二。郎。が。厚。志。や。り。自。害。を。そ。ま。り。て。
夫婦。の。約。を。し。助。太。刀。を。と。の。じ。う。ま。で。つ。ぶ。さ。に。結。り。ぬ。健。助。は。ぬ。を。始。
て。す。且。怒。り。且。悲。心。も。く。く。み。て。む。と。ま。う。哭。け。る。が。お。の。ぬ。が。分。の。う。へ。を。も。語。り。
出。し。弓。見。が。母。の。痛。お。て。一。命。を。と。ま。り。美。濃。國。を。の。ぐ。れ。出。し。う。つ。心。ま。り。仔。
細。貝。お。の。ぬ。ぢ。病。を。愁。ふ。る。う。妻。が。非。命。お。死。せ。し。う。幼。児。を。失。れ。ん。と。思。ひ。
つ。あ。と。る。心。の。苦。し。さ。ま。で。ど。り。あ。つ。め。て。と。や。う。お。語。り。け。ぬ。弓。見。は。幼。時。の。ぬ。
と。る。お。袖。お。あ。ひ。ま。し。く。の。ぬ。ぬ。と。と。と。と。を。結。り。せ。め。て。心。を。や。ん。と。し。

みて。来。つ。る。お。ぬ。が。ぬ。を。穿。て。甚。力。を。お。し。小。松。が。子。を。と。り。て。お。る。よ。ま。見。を。さ。
う。ゆ。い。の。を。と。と。悲。歎。の。涙。お。む。せ。う。り。ぬ。皎。二。郎。も。父。の。敵。を。尋。る。と。あ。旅。寝。
お。年。を。か。さ。ぬ。つ。る。仔。細。を。か。り。り。り。あ。ぬ。が。か。く。寄。り。集。る。も。比。自。薄。命。の。お。あ。
ろ。ぞ。と。て。三。人。と。も。に。外。を。と。や。み。て。哭。ぬ。初。皎。二。郎。か。と。ぬ。て。健。助。お。ひ。り。る。は。
吾。主。の。物。語。を。穿。に。心。せ。ぬ。も。理。あ。ぬ。と。う。あ。ら。む。短。慮。を。つ。と。さ。ぬ。幸。ひ。
我。路。費。の。貯。あ。ぬ。が。負。苦。の。一。ツ。ハ。ま。く。ふ。に。安。一。病。の。う。も。名。医。を。え。よ。び。て。糸。
を。と。心。ま。ぐ。う。に。保。養。せ。ば。う。あ。ら。む。平。愈。あ。ら。ぬ。弓。見。が。力。と。この。む。も。の。吾。主。
の。外。お。あ。け。ぬ。ハ。一。命。を。全。一。て。仇。を。報。る。力。を。え。む。へ。我。非。車。又。お。ぬ。ま。で。ハ。
薄。命。あ。ぬ。と。心。長。く。時。節。を。あ。ら。む。づ。ひ。お。宿。志。を。ま。げ。て。再。面。を。起。す。
時。あ。ら。ぬ。山。皇。天。の。憐。れ。あ。ら。ぬ。ん。や。あ。ら。ぬ。ひ。あ。ら。ぬ。と。あ。初。首。能。を。え。や。り。
は。あ。ら。り。て。捨。ち。を。か。て。と。い。妻。女。の。あ。ら。ぬ。と。申。く。用。意。一。む。へ。と。て。金。子。

を出してあぐけぬ。健助涙を流して恩を謝し、里人をかきこめて、指を
索野邊のおくりをいとおみ。僧を供養してあとぬんごろにむすひ。此の
病を保養し、姫君をこまけて、主君の讎言を復し、脚巨恩を報じと誓言を
しげぬ。故二郎の児、大蛇悦びて、志むく此泉ふまう三人相豆み力をほそ
末のあはれをねえりる。夫ハおとさ愛ふ又大蛇太郎、胎子を得て、鰻
養命命。茶を調合せめて、もちわらるに、靈茶の奇特によりて、不日
あ平愈し、あ眼全くと明あありけぬ。大蛇悦び、夜宴を催して、小賊等
そとも祝酒をくみ、鰻養をよび出して、いひる。我此山寨ハ地獄あひし
く一度こそおちつる者、再活てぬり、いじこいへども、你幸ひして、我難症を
まごひぬ。其功を賞して、前ふ約せしごとく、今夜家におちるぬまじ。你ハ
命つよき者ありこそ。打笑ひ、且一盃を酌じといひて、あぐ鰻養ハ毒蛇の口

猛虎の牙をまぬり、あして、おびおつく、盃をうけて、酒をあましくつじぬ。
やうて傾んとし、なる折ハ、佛法とあく鳥の音山、あふとてちうく、聞也。
鰻養身を倚松の尾の峯、静ある曙ふ。ああめつじと、ひとごとうて、盃を
あひぬ。太郎アアめていそく、你かの鳥を知らぬ。鰻養いそく、かの鳥ハ佛
法僧ハいそくや。太郎いそく、いそくもあう。你此山をいつくところおもふ。鰻養
いそく、やつぐれ若うりし時、医乃修行の乃、普諸國をめぐりつるが、九佛
法僧の栖山ハ、高野山、松尾山、醍醐の峯、河内の杵長山、さてハ上野の
迦葉山、下野の黒髪山、小限山、やつぐれ三四夜を過て、こままつぬ。
おとさくハ此所、迦葉山、黒髪山、あはれ、いそく。太郎打うあう。你ハ
量ふとらむ。此所ハ黒髪山あり、我你ハ引出物とせん。ちうくまらぬ
れといふを、鰻養ハ何の意もあく。あざり出て、ちうくまらむ時、太郎

つとまて刀をぬくよとつとて一が。忽こちまち 鍛あん 養うまへ が頭くまへ 前まへ 小こ まるひおちぬを
 血ち 刀やいば をさし出して。小賊こしやく 小血こち をのこせ。此こゝ 死あぢ 酒さけ 宴あそび のさあさげあり。こ
 くらりまをよといひて。床とこ の下した 小こ 踏ふ をしぬ。小賊こしやく 等ら のおろ。寨さや 主しゆ 小こ
 中ちゆう 一いつ ぬじめをよはし。おあせられし。今いま 又また 殺ころ 一いつ ぬお何なに 由よし ぞ。太郎たろう い
 ち。我われ 加か ぬをあるとんとおもひ一いつ が。かぬ佛ぶつ 法ぽう 僧そう の音ね をぞ。知し りとる
 由よし ぞ。に。おし。昔むかし 曆れき 德とく の順まつ 松まつ の尾お 山やま の賊あか 主しゆ 仏ぶつ 法ぽう 僧そう 一いつ 声こゑ のおに
 減めつ 比ひ 一いつ とる例れい あり。かぬも又また 口くち あり。いづれなり。かぬをもささる人ひと やそ
 い。小賊こしやく 等ら 小こ ぬをすて。太郎たろう が思おも 慮り の深あ さことを感かん 下げ 小こ 鍛あん 養うまへ
 日ひ 一いつ 貪とん 欲よく の心こゝろ 深あ さ不ふ 義ぎ の財さい をひささ。おし。報むか 小こ ありて。今いま 賊あか 手て に
 身み を失し 小こ 愛あ くの報むか 善ぜん の報むか 小こ 速すみ ありと。つ。常じょう 言ごん も。理ことわり あり。お
 優う 曇とん 華け 華け 物ぶつ 語ご 卷まき 之の 四よ 下した 終つひ

報むか 養うまへ 之の 功こう 也なり
 小こ 鍛あん 養うまへ 之の 功こう 也なり

念ねん

